

# サイラスという男 XI (補遺)

—H. E. ベイツのあるヒーロー—

中 林 瑞 松

## はじめに

この『サイラスという男』を書き始めたのは1991年で、そのとき手許にあった「サイラス物」(Silas stories)は『サイラスという男』(中西秀男先生卒寿記年論文集 1991年3月)の「はじめに」で述べたように、19篇であったので、それがすべてと思い「サイラスの酒」(その一)と『サイラスという男』(早稲田人文自然科学研究 第39号)の(その二)で両者の関係を読んで、これでよしとした。ところが後になって *SUGAR FOR THE HORSE* (MICHAEL JOSEPH LTD., 1957, これも「サイラス物」だけを集めた)が手に入った。これには12篇が収められているが、そのうち2篇が他の集と重複しているので、結局29篇が手に入ったことになる。(ただし作家の短篇を全て入手したわけではないので、まだ手許にない「サイラス物」があるかもしれない。)

そして本人の言うことを信ずれば、サイラスは92年のあいだ酒を飲みつづけていたので、すべてではないにしても多くの作品の中で酒を飲んでいる。それに種類も多い。とするとサイラスと酒との関係は二回で読んだだけでは不十分に思われてきた。どうしても新しく手に入った作品も読まなければ、両者の関係がすべて解ったことにはならない。そこで「補遺」でそれを総括することにした。

いまひとつ、サイラスのユーモアのセンスについても同じことが言え

る。ただし酒との関係ならば、29篇のうちで如何なるかたちでも酒を飲まない作品がいくつかあるが、彼が登場しておりながら、そのユーモアのセンスを発揮していない作品などはない。しかも英国人のユーモアというものが、外国人が理解(?)しようとする一筋縄ではいかないものなので、今の時点ではここまで読めた、ということしか書けなかった。なお、引用文の後に付した頁、行は同書のものと一致する。

### サイラスの酒

「三歳でビールを飲み始めた。いやたいした量じゃない、朝飯にほんの1パイントだ。」(A Teetotal Tale) と言い95歳で他界しているのだから、サイラスと酒との付き合いは長い。そして「一艦隊を浮かべてもまだ余るほどビールを飲んできたんだ。嘘なら、神よ罰し給え。」(The Lily) と殊勝げに言ったり、あるいは「日にワイン一壘を欠かさずに空けてきた。」(The Sow and Silas) といわれているのだから量も多い。しかし「サイラス物」のなかで、現実にもあるいは昔話のなかでも、一滴も酒を口にしない作品がある。それらをまず指摘しておく。

‘A Teetotal Tale’の冒頭の文は先程の「三歳でビールを……」である。「絶対禁酒の話」をこの言葉で始めるのは、いかにも人を食った遣り方ではあるが、そこがサイラスらしい。場面ではサイラスと「私」はカウスリップの花頭——カウスリップ酒の原料——を摘んでいる。二人とも酒は飲んでいない。サイラスが20歳代前半の頃の昔話をしている。ある娘を見初めた。「十分に成熟している。まるでモスリンの袋を被った固く熟れた洋梨」のようであり、一緒にいた母親は「せいぜい35歳ぐらい。大輪の黄色いバラの風情。開き切っていた。」ところが二人の夫であり父である男はアルコール中毒による振顛譫妄症で、施設に入っている。このために母親がひどいアルコール恐怖症に罹っており、娘に会

おうとしても四六時中母親が傍にいるものだから、つまるところ娘と逢瀬を重ねていた二カ月間は一滴も酒を口にしなかったという話。

‘The Bedfordshire Clanger’にも酒を飲む場面はない。これは人を懲める話であるが、同じ懲めるのでも相手が男であれば、きっとサイラスは祝杯をあげて勝利に酔っている。(‘The Race’も‘The Eating Match’もこの類。)しかしこの話の相手は女だったので、「彼 [サイラス] はワイン臭い息を吐きながら話をした」という描写はあるものゝ、ワイングラスには手を出さずに、女をしっかり抱いていたという。

上の二つ以外では‘A Silas Idyll’, ‘The Blue Feather’と‘The Foxes’である。最後の短篇では終りの近くで *The Swan with Two Nicks* (パブの名) の閉店時刻を気にしているので、物語が閉じた後で行ったかもしれない。ついでに‘The Return’はサイラスの死後の話なので、もちろん本人が酒を飲む場面はない。

上の六作品を除くと、他の23篇ではどこかでサイラスが何かを飲んでいる。それはビール、ウィスキー、エルダベリー酒 (elderberry wine), カウスリップ酒 (cowslip wine), あるいは赤スグリ酒 (red currant wine) である。後の三種類は植物の花あるいは実を原料にした自家製のものであって、エルダベリー酒とカウスリップ酒だけは自分の屋敷内で原料を調達して自分で造り、セラー (食料やワインの地下貯蔵室) に貯えてある。それで――

‘The Lily’――すでに『サイラスという男』I, III, VIIIで読んだ――では、訪れた「私」を相手に一杯飲<sup>ち</sup>ろうとしてサイラスは『おーい、下にいるんならカウスリップをひと壺持<sup>ち</sup>ってきてくれッ』‘Woman! If you’re down the cellar bring us a bottle o’ cowslip!’と家政婦に言い付ける。ところが彼女が二階にいたものだから、二人の間で激しい言葉の遣り取りがあって、「家政婦は……緑色のワインボトルを持って入って

きた」the housekeeper … came in with a green wine-bottle. なにはともあれ酒がきたことで「私は澄んだ黄色のワインをタンブラーに注いだ。」I filled the tumblers with the clear sun-coloured wine. そして二人は戸口の椅子に腰をかけて「甘く冷たいワインを吸りながら」sipping the sweet, cold wine 庭を見ているのである。庭には赤い百合が咲いている。この花の由来を「私」がおじに訊ねる。このときサイラスは93歳、おそらく80年も前の10歳代の忘れ得ぬ出来事を語るのである。「私は強くて冷えた、花の香りがするワインを一口飲んで……」I took a drink of the strong, cool, flower-odoured wine … おじが話し続けるのを待っていた。

このように短篇のあちこちでこのワインが断片的に描写されているが、これらを総合すると、外見は澄んでいて黄色、味わうと甘くてアルコール分が強く、そして花の香りがする。Coldとcoolで形容されているのは、もちろん地下室に貯蔵されているためで、冷蔵されているためではない。(このことが‘The Eating Match’で話題になる。) 因にその製造法はある本によると「カウスリップというサクラソウに似た植物の、黄色い花頭をボイルし、それに砂糖と酵母菌とを加える」のだそうだ。図鑑によるとこの花は散形花序であって、サクラソウではなくてオクスリップ (Oxlip) に似ている。それはともかく原料が黄色い花だから sun-coloured であり flower-odoured なのであろう。

このワインが‘The Death of Uncle Silas’では家政婦を欺くために harness oil (馬具油) に譬えられており、‘The Singing Pig’では薬 (medicine) に姿をかえて「黄色い薬をコップに一杯」a glass of the yellow medicine となっていて、それを飲んだあとでは「サイラスおじの顔にうかんだずるような笑いや、何度も旨そうに舌鼓をうっていることから判断すると、その薬はけっして不味いものではなさそうだった

た。」また 'The Widder' では、ある未亡人の家へサイラスが遊びに行つてこれを御馳走になる。そのとき「緑黄色のワイン」a glass of greenish-yellow wine を飲みながら『まっこと美味なカウスリップ酒だ』'Very nice mouthful o' cowslip.' と言うと、彼女が『そうでしょうとも……5年ものですもの』'It should be, dear. … It's the five-year old.' と言っているから、年数が経つほどに熟れて味がよくなるものらしい。'The Return' では、「私」がサイラスの死後一年と少し経つておじが住んでいた家を訪れてみると、別の家族が住んでいる。新聞記者と身分を偽つて家に入ることに成功し、地下室へおりたところ、隅の暗い所に壺が数本残っているのを見つけた。栓を抜いて嗅いだときの描写は「その酒の何とも絶妙な花の芳香はすばらしいものであった」The old delicate flower aroma of the wine was wonderful. が、傍にいるウェイド＝ブラウン夫人（新しい住人）への説明は、サイラスが最後に使っていた「馬具油」であった。——これがサイラスが死ぬ間際まで愛飲していたワインの一つである。

つぎにエルダベリー酒——elder wine (エルダ酒) ともいう——を見る。これはニワトコの木の花の赤、黒または黒紫色の液果様の核果を原料にして造るもので、日本酒のように爛をして飲んでもよいものらしい。

'The Eating Match' に「サイラスおじが低能帽に似た銅製のポットにエルダベリー酒を入れて暖炉で温めて……」… with my Uncle Silas hotting up his elderberry wine over the fire in a little copper pot shaped like a dunce's cap. いる場面があり、そのすぐ後で『爛をしたほうが美味いか冷やのほうが美味いか……まだ決めかねているんだがな』'Never bin able to make up me mind yit' … 'whether it tastes better hot or whether it tastes better cold.' と言っている。ただしこれは真冬に、むかしある男と食い競べをした話をしている時である。

真冬のことで、いかに暖炉の傍とはいえ、冷たい酒よりはいくらかでも温めたもののほうが、好き嫌いはあるだろうが、たしかに口当たりがよい。それでサイラスが決めかねているのである。英国ほどに寒くはない我が国では、聞くところによると、日本酒の温め方には超熱爛、熱爛、上爛じょうらん——爛は人肌といわれ、人肌の温かさ——と温爛ぬるらんの別があって、爛をして飲むのが普通のようなのである。

それはさておき「彼はあたたか温いエルグベリ酒を注いだ」he renewed his warm elderberry wine. とあるから、この作品では終始温めて飲んでるのである。さらにこゝでは大法螺吹きおほくわいのジョウイを負かした話をしていて得意満面のところだから、「グラスの中の濃いバラ色を通して暖炉の火を見詰めながら」looking at the fire through the dark red rosiness of his glass, わざと間を置いて余裕たっぷりあまよに味わっている。ただし、話のなかの食い競べくいけいべをしている最中は、もちろんビールで食べ物を流しこんでいる。「サイラス物」の29篇のなかでワインを飲む場面は多いが、それを温めて飲んでいるのはこの一篇だけである。これを平常の温度で飲むのは、日本の常温とはちがって夏でも気温が低い英国のことであり、しかも地下室に貯蔵してあるのだから、日本でいえば冷やして飲むのと同じであろうと思われる。

‘The Singing Pig’——すでにカウスリップ酒の項目で読んだ——では胃腸の薬として登場させられる。サイラスがむかし歌をうたう豚を飼っていた話をしていているときに、どうしてもそれを信じない人がいて、そのために体調が崩れた振りをして薬を要求する。祖父がその薬を持って来ると「二種類あって……もう一方は黄褐色がかった濃い赤だった。」There were two kinds of medicine, … the other a deep tawny red. これを簡単に「赤い水薬を自分でグラスに注ぎ始めた」started pouring himself a glass of the red medicine とだけ表現している箇所もあるが、

いずれにしても原料のニワトコの実の色がそのまま、製品に現われているということである。

‘The Widder’——これもカウスリップ酒の項目で読んだ——は、ある日サイラスおじと一緒に後家さんのギャズビィを訪れたときの、「私」の目を通して見た一日を語る。未亡人についての「私」のイメージは肥えていて陽気か、さもなければ痩せていて気難しく、磁器のような顔中に細かな皺があり、服はいつも黒で、喘息カリューマチ、あるいは関節炎を患っていて、杖を、人によっては二本も突いて歩いており、救貧院の世話になっているというものであった。ところがこの後家さんが着るブラウスは白い羊脚形でダークブルーのスカートを穿き、エナメル革のベルトを締めている。肌はまことに滑らかで、両の眼は大きくて緑色に輝やいている。両の耳には大きなイヤリングを下げていて、笑うたびにそれが揺れている。

この後家さんに家に請じ入れられて一言二言挨拶を交したあと、すぐに大人の二人はワインを飲み始めた。ここで二種類のワインが話題になる。まずサイラスが緑黄色のワインを飲んで『これはまっこと美味いカウスリップ酒だ』（既出）と言うと、『そうでしょうとも5年ものなのよ』（既出）と答える。そしてさらにサイラスが『エルダベリー酒より良いかどうか、どうも分らん』‘I ain't so sure,’ … ‘as it ain't a shade better 'n the elderberry.’’と言うと、彼女は「いえ、いえ、そうお思いになるの？ エルダベリー酒はほんの<sup>おとし</sup>一昨年<sup>まだ</sup>のなのよ。だから未熟ね。」‘Oh! no, oh! no.’ … ‘You think so, dear? The elderberry's only the year before last, dear. It's not ready.’と答えている。これから推測すると、エルダベリー酒もある年数を寝かせておくと、熟成して味が良くなるものらしい。

‘The Death of Uncle Silas’でも前作品と同様に、二種類のワインを

飲んでいゝ。ベッドの傍に竹製のテーブルがあつて、その上にレモン色の壺と黒っぽい色の壺の二つの薬が置いてある。もちろん黒っぽい方がエルダベリー酒で、話が進むとサイラスの口から『黒っぽい色にはエルダベリー酒が入れて』‘Elderberry in the dark’ があると明らかになる。壺そのものゝ色ではなくて、中味のワインが黒っぽい色だから「黒っぽい色」という表現になつたのであろう。そして家政婦が中味は正真正銘の薬と信じて飲ませたとき、彼は『ヴィネガーみたいだ』‘It’s like … vinegar.’ と言つてゐる。ある本によるとこれは「ぶどう酒、りんご酒、麦芽酒などから作る食用酢」とあるから、まったくの的外れな<sup>たとへ</sup>比喩でもない。——これもサイラスが死ぬ間際まで愛飲してゐたワインの一つである。

つぎに赤スグリ酒について見る。

‘Queenie White’ のなかでは「サイラス物」29篇で他ではまったく例を見ないワインを口にしている。すなわち、この日は「私」が持参したワインを林檎の木の下で飲むことになつて、サイラスはそれを口に含むなり『これは美味いよ。赤スグリ酒だな』‘This is a drop o’ good, boy. Red-currant, ain’t it?’ と言つており、それを舌の上で転してからさらに『エルダベリー酒よりもちょっと辛口で、カウスリップ酒ほど花の香りが強かない……』‘It’s a bit sharper ’n elderberry and it ain’t so flowery as cowslip, …’ と味について感想を述べてゐる。そしてなおも続けて『わしがこれを飲んだのは、そう、40年ほども前になる』と言つるのである。

無類の酒好きであるサイラスがこれほどまで誉めるワインを40年も口にしていないということは、何とも不思議なことである。そもそも、彼は屋敷内で穫れるカウスリップやエルダベリーを原料にしてそれぞれのワインを造り、愛飲してゐる。そしてこのワインは各種のスグリ科の木の



実を原料にして造るものであり、そして‘The Lily’には「私は……撓わに実っているフサグリやセイヨウスグリの間を通してそこ（馬鈴薯畑）まで歩いていった」I walked down … to it [the potato-patch] between … full-fruited bushes of currant and gooseberry. という描写があるのだから、屋敷内にはスグリの木があるのであって、その気にさえなればスグリ酒も造れたはずで、何も40年振りでなくとも飲めたのである。

しかしサイラスはそれをしなかった。いや、作者のベイツが主人公にそれをさせなかった。ある意図があったのである。作品に描かれているものばかりではなくて、作品のなかで本人が仄めかしているものまで加えると、サイラスは80余年にわたる豊かな女性遍歴を有っている。そのなかでもパブ *The Cat and Custard Pot* の新妻であるクウィニーとの、止むに止まれぬ義侠心からでた行動——『サイラスという男』(IX) で読んだので筋を追うことは省く——は他に例を見ないものである。あのことがあった当座はいうに及ばず、クウィニーはすでにこの世には亡い人であるにも拘らず、40年以上を経た今でも彼女の名を口にすることはサイラスの一族では厳禁ということから推し測っても、並々ならぬ出来事であったことが解る。

サイラスの生涯でも特筆すべきこの女との出来事を話しだすには、それなりに特別なワインが露払いの役を演じなければならない。いつも飲んでいるワインでは駄目である。ウィスキーでは軽すぎるしビールでは陳腐である。やはりここでは「この40年一滴も口にしなかった」赤スグリ酒を措いて外にない。これが作者の意図であったと読む。

‘Silas the Good’——すでに『サイラスという男』I, IVで読んだ——では、ウィスキーだけ(?)を飲んでいる。すなわち80歳の半ばで墓掘りをしていた頃、ある年の5月、急に夏のような暑さになった日に仕事

をしていた。昼食——パンと紅茶（ビール壺に入れてある）——のあと墓穴で昼寝をしていると、女に怒鳴り起こされた。手にしていたビール壺が誤解され、死者にとっては神聖な場所で酔払って寝ているとは不敬も甚しいという。そこでサイラスは『この中味は蠅も殺さないばかりか、あなたにだって何の害もない』たゞの冷茶だといって女にも勧めて自分も飲んだ。

ただ、例年ならば5月には夏用の冷茶——コールドティに少しウィスキーを混ぜたもの——を持ってきているはずなのに、この年はたまたま寒さが続いていたもので冬用の飲物であったと、後で本人が打ち明けている。この「冬用の飲物とは冷茶にたっぷりウィスキーを入れたもの」*a winter ration wi' pretty a mugful (of whisky) in it [cold tea]* であった。

‘The Little Fishes’のなかでは、サイラスは釣り——彼は手摺みにするのだから魚捕り——に出掛けるときには、必ず幼い「私」を連れていった。そして必ず *neck-oil* なるものを持っていった。この薬の効用は、釣りというのはじっと坐って待っていなければならない、苛ついてはいけない、苛々する気持を抑えるのだという。それで幼い「私」が飲ませてくれと頼むと、喉が渴いたら泉の水でも飲めと言う。見たところ「それは淡い緑がかった黄色、むしろカウスリップの花の色のものがあることが多く、パースニップの根の色であったり、ときには紫がかった赤色、すなわちニワトコの実の色、あるいはまたブラックベリーやセイヨウスモモの色のこともあった」… *the neck-oil, which was often pale greenish-yellow, rather the colour of cowslip, or perhaps of parsnips, and sometimes purplish-red, rather the colour of elderberries, or perhaps of blackberries or plums.* ということなので、サイラスの *neck-oil* の実体はカウスリップ酒のことが多かったがパースニップ酒の

こともあり、またはエルダベリー酒、ブラックベリー酒、プラム酒のこともあったようである。

最後にビールとの関わりを見る。

本論の冒頭(80頁)に引用した本人の言葉を信ずると、95歳でこの世を去ったのだから92年の間これを飲み続けてきたことになる。そしてそもそもその初めから味が分って飲んだのではなくて『私が生まれたのは飢餓の40年代の初めで、すべてが悪い時代だった。水も悪かった。……だから誰も彼もがビールを飲んだ。赤子までがビールを飲んだ』と‘Silas the Good’のなかで当時を回顧していることから判断すると、その飲みっぷりは凄じかったにちがいない。それを示す実例が‘The Sow and Silas’の初めのところにある。

— 毎年8月のネンウェルド<sup>1+</sup>市が開かれる日曜日に、サイラスも一族の集いに顔を出すことにしている。集合場所までは当人の家からは7マイル(11キロメートル)弱だから、馬車で行けば1時間もあれば十分である。それで昼までには着けるようにと8時には家を出た。ところがソウルドロップの村に*The Bell*というパブがあり、そこに寄って11時近くまで飲み、隣村のノティング・フォックスでは*The George*で、さらに3マイルもないイェルデンで2クウォート(約2.4リットル)を飲むか飲まないうちにディナの時間になっていた。さらに少し横道に外れて*The Swan*で飲み、目的地に着いたのは午後もだいふ遅くなってからであった。

「このあいだじゅう私達は祖母の家で、まず彼のいないまゝでディナを食べ、さらに彼ぬきでお茶を飲んで待っていた」という。午後のお茶は4時頃が普通であるから、サイラスが家を出てからこれまで9時間ほどが経っていると思われる。この間に飲んだ量は、イェルデンのパブで1クウォートを二杯とあるからビールであり、他の三軒でもビールと考

えてよかろう。ということで、サイラスはビールをこのような飲み方をしている。たゞ、この4軒のパブで飲んだビールは特別な記述がないから、ビール会社で造られて樽に詰めて配達されているもの、いふなればどこのパブでも飲める普通のビールと考えてよい。

しかし‘Aunt Tibby’では少し別のビールを飲んでいる。(この短篇ではティビおばさんがサイラスおじに纏る昔話を「私」に語る。)ティビおばさんは *The Haymaker* を営業っている。もちろんビールも飲ませたし料理も出した。彼女自身の『……あの人 [サイラス] は自家製のビールを……お腹いっぱい飲みたかったのよ。その頃うちにはちょっとした自家製のビールを置いてあったから。……それはとっても強かったのよ。』‘He [Silas] wanted gorge himself on home-brewed …’. I used to keep a fair drop of home-brewed in those days. …it was very powerful.’ という言葉で明らかかなように、自分の店で独自の味とアルコール度をもつビールを醸造して客に飲ませていた。

ところが店で働いていたバーメイドの一人に魅せられて、サイラスがちょっかいを出している現場をティビおばさんに見付かってしまった。これも彼女の言葉を借りると『わたしは彼女が地下室で彼の膝に抱かれているところを捉えたの、そして彼は自家製のビール樽に坐っていたのよ』‘I caught her sitting on his lap in the cellar.’ …‘… and him sitting on a barrel of home-brewed.’ ということになる。このことでサイラスはティビおばさんにこっぴどく痛めつけられて、二度と姿を見せることはなかったという。

このようにサイラスはいろいろな酒を、しかも多量に飲んできた。そしてそこにこそサイラスという男の本当の姿があるように思える。またその飲み方も酒の種類によってちがっていた。そしてそこにもサイラスという男の本当の姿があるように思える。これを締め括りの言葉とした

い。

### サイラスのユーモアのセンス

#### ‘The Singing Pig’

これは *SUGAR FOR THE HORSE* に収められている。サイラスが大そう可愛がっていた雌豚があった。生後6週間ほどの頃に市で買いられて、長じては雌豚としての役割りを十二分に果して死んでいった。これほど素晴らしい豚はこの世に二頭としない、何とか世間に知らしめてやりたい、そのためには己が世間の嗤い物になってもかまわないというサイラスの、表向きは豚への強い愛情からこの物語が生まれた。ところで雌豚の価値はほかでもない、どれほど多くの仔豚を産んだかによって定まる。この雌豚は一腹子を16匹を3度、17匹を2度、そして19匹を産み終えたときに死んだ。(と地の文では冒頭にある。しかしサイラスと従兄弟のジョージの会話では14匹を1度、15匹を1度、16匹を2度、17匹を1度、そして19匹が最後ということである。しかしこの違いは問題にはならない。最後はどちらも19匹だから、それでよい。)生涯に90匹以上の仔豚を産んだのだから、サイラスとしては彼女の死を黙って見送すわけにはいかない。それで、

She could also sing very nicely. She could sing *The Bluebells of Scotland* and several other tunes, including one my Uncle Silas himself composed for her. (p. 103, ll. 3-5)

彼女はとても上手に歌がうたえた。「スコットランドの釣鐘草」やそのほか、サイラスが特別に作ってやった曲も加えていくつかうたえた。

これを聞いて「私」の祖母——サイラスのいとこにあたる——は「そうでしょうとも。頑はない子供の頭にもっと馬鹿話を詰め込むといいわ。もっと話をつくんなさい。その子があんたみたいな与太にならなきゃ、

この命をあげるよ。」と毒舌をふるっていたが、これはとりもなおさず世間一般を代表していると考えてよい。こうまで言われるとサイラスは旗色が悪い。そこで「ジョージ、お前もそこにいたんだから、わしと同じくらいははっきり聞いたよな。お前はあの晩あそこに……」と「私」の祖父を仲間に引き入れようとする。ここでもしジョージがサイラスの言葉を肯定しようものなら、大袈裟に言えば一蓮托生、サイラスと共に世間の嗤い物になることを覚悟しなければならない。ところがジョージは性格が柔和で温和、けっして世間と事を構えようとはしない。だからこの場の返答も曖昧で明確さを欠いている。いうなれば世間の無関心派を代表しているといつてよい。

祖母の矛先はいつそう鋭くて「その晩、あんたは強かに酔ってたんでしょ」とか「悪魔の囁きでも聞いたのよ。」防戦いっぽうになってサイラスは「まあ、聞いてくれ。彼女が死んだ晩のことを話すから」と言いながら、

… he could draw from his breeches' pocket his big red handkerchief, lift it to his face as if to wipe away a dewdrop or a tear and then, solemnly, slowly, sadly let it fall to his lap. (p. 104. ll. 21-25)

彼はズボンのポケットから赤い大きなハンケチを取り出して、鼻汁か涙を拭うかのように顔に押しあてて、それからもったいぶって、ゆっくりと、いかにも悲しそうに膝に落した。

これは、所作によっても世間の情に訴えて主張の正しきを受け入れてもらおうとする、サイラスの気持の現われであった。さらに「なんてったって、後脚で立ち上って踊ったり、数を算えたり、はたまた手品をする犬がいるかとおもえば、お喋りをするコクマルガラスがいたり、芸をする蚤がいたりするし。それにお喋りをする雌鶏を飼ってた奴がベドフォードにいたな……」と、世間の分別にも訴えるのである。このような

動物や鳥、さらには虫までが現実には存在するのだから、歌をうたう豚がいて何が可怪しいかと言うのである。これらの例を引き合いに出しても、やはり祖母の反応は冷やかで「わたしったら、なんでこんな所でお前さんの馬鹿話を聞いてなきやならんのかね、ほかにやらなきやならん仕事もあるってのに」と、席を外してしまった。

こうなると、どうしても「私」を相手に話を続けること、「私」に話を聞いてもらわなければならないことになる。そもそもこの「私」というのは幼い時から最も重要な脇役として「サイラス物」に登場するか、あるいはもっと重要な語り手としてサイラスの行状を明らかにしている。もし「私」の存在がなかったならば「サイラス物」29篇は存在しない。もちろんこの場面では唯一人の聞き手として、物語の進行に重大な役を果たしている。事態がこのようになっては、サイラスとしては酒の力を借らなければ道化役を続けていくことはできない。そこで無関心派を代表するジョージに、胃腸の薬と偽ってワインを持ってきてもらう。やがて雌豚が出産する話に進んでジョージが、一腹子を14匹を一度、15匹を一度、16匹を二度、17匹を一度産み……さいごに19匹を産んだことに及ぶと——これはジョージの口から出ていることなので、地の文とは数字は一致しないが、多くの一腹子を産んだことだけは確かであろう——それを遮って、

'Don't talk about it, George,' my Uncle Silas said, and once again he used that sudden and resigned gesture of sadness, 'it gives me a turn to think o' the poor old gal.' (p. 108, ll. 20-21)

「ジョージ、それはやめろ」とサイラスおじが言って、とつぜんもう一度あのさも悲しみを押し殺しているといった風を見せた。「あの可哀相な女のことはつらすぎてとても考えられん」

と言いながら、薬でも飲まなければ遣り切れないといった風に、実はワ

インの入ったグラスに手を延ばすのである。いかにも切な気な、悲しみに打ち拉がれた姿を見せたあとで「あれが17匹の一腹子を産んだときは、歌は *The Rosy Tree* にそっくりだったな」と前置きをしてから「19匹も一度に産むなんて、あれには荷が重すぎたんだ。だけどいい女<sup>こ</sup>だった。おしまいまで歌ってたものな」と言った。19匹目を産み終えて絶命し、歌 (*The Bluebells of Scotland*) も途絶えたというのである。これを語ったときサイラスは、

Picking up the medicine glass, slowing filling it and holding it up to the light, he seemed to stare through it as if seeing far beyond it the dark little pig-sty lit by nothing but the light of the candle lantern, with the sow breathing her gentle song. (p. 110, ll. 1-5)

薬のグラスを手にとって、それに満たす速さをゆるめて明りに翳したとき、まるでおじは、遙か向うに手提ランプの明りに照らされて、静かに歌を私語<sup>つづか</sup>っている雌豚の小屋が見えているかのように、彼方に目を凝らしていたのである。

このあとでサイラスが雌豚の思い出に乾杯と言ってワインを飲み干したとき、もちろん世間を代表する「私」の祖母はおらずに、ただ「私」だけが泣きたいような気分になっていたのであった。その通りで、ここまで話が来れば世間の存在など問題ではない、いや、それはかえって邪魔にさえなる。「私」さえサイラスのユーモアのセンスから出た話に聴き入り、その仕草を受け入れさえすればよい。そうすると、物語の最後の「たぶん豚が歌をうたうなんていうことはありますまい。たとえあったにしても、そのために哭くなんて馬鹿げております。とはいうものゝ、サイラスおじが指摘するように、歌もうたえない人間がこの世になんと多いことでしょう。そしてこの私も、死に瀕している豚と、それが静かにうたう歌の半分も私を感動させてくれない輩がこの世には掃いて捨てるほどいるように思うのです。」という述懐に達する。そうなってこそ



サイラスが道化の役を買って出て、手をかえ品をかえて豚が仔を産みながら歌をうたうことを証明しようとした甲斐があったといえるのではないだろうか。

最後に一言。ここでサイラスは犬や猫にうたわせるのではなく、はたまた羊にうたわせるのでもなくて、豚をひっぱりだして誉めあげ、そのためなら己も嗤い物になろうとしている。これは豚という動物が旧約聖書で *And the swine, because it divideth the hoof, yet cheweth not the cud, it is unclean unto you: ye shall not eat of their flesh, nor touch their dead carcass.* (『申命記』14:8) (そして豚、蹄は割れているが反芻をしないから不浄である。その肉を食べてもいけないし死骸に触れてもいけない。) とまで忌み嫌われているからこそ、なおさらそれに歌をうたわせたかったのであろう。

### ‘The Return’

まず完全に対照的な二つの世界——「或る世界」と「別の世界」——の様子を描き、そして「或る世界」の遺物が「別の世界」の住人に如何なる影響を及ぼすか、あるいは前者に対する後者の反応の仕方を描く。「或る世界」とはサイラスが住んでいた頃の家屋敷を指し、「別の世界」とはサイラスの死後に別の人が買い取って住んでいる家屋敷のことである。また遺物とは前の住人であるサイラスが故意に遺しておいたものであって、「私」を仲介として、それに新しい住人が様々に反応する。その原因となるものを遺したところにサイラスのユーモアのセンスを読み取りたい。だから他の「サイラス物」のように彼自身が行動するのではなく、単なる物体である遺物に生きている人間を如何に反応させるかは、仲介となる「私」の腕の見せどころということになる。

二つの世界の比較対照から始まる。サイラスが死去してから1年と少

し経った頃に、70年間おじが住み馴れた家を「私」が訪ねた。そして昔よく来ていた頃に馴染んでいた物たちを探し求めた。ちなみにサイラスと「私」の年齢の差は60ほど（‘The Wedding’の冒頭にある文から推測すると）であって、二人の密度の濃い付き合いは、他の「サイラス物」から判断して、4半世紀に及ぶ。とするとサイラスと20年も寝食を共にしてきた家政婦よりも、この家の内外の状況を熟知していると考えられる。春夏秋冬それぞれのサイラス家の変化は「私」の脳裏に焼き付いていたことであろう。それでこの日も暖炉の煙突から立ち上る煙、<sup>とりおど</sup>鳥威しや案山子、りんごの樹の中に立てた梯子、庭といわず屋敷内の畑といわず至る所に甘酸っぱい香りを漂わせている焚き火の煙、それに雌鶏の鳴き声や庭の外れのニワトコの根元にある小屋にいる雌豚の鳴き声——これらを見たい嗅ぎたい聞きたいと思ってやってきた。

さらに樹木をこまかく見ると、早生のりんごの木、晩生のりんごの木、桜の木、黒サクランボの木、セイヨウスモモの木、グズペリの木、ニワトコの木やキイチゴの木が、小さな畑でない所に幾本もあって、その向うは、すなわち屋敷の外は松林である。この小さな畑からは季節によって様々な作物——麦、馬鈴薯、豌豆など——が穫れた。だから案山子などが必要であった。

ところがサイラスが亡くなって1年と少しばかりの間に、家屋敷の様相は一変していた。家に近づいても鶏や豚の鳴き声などは聞こえずに、異様とも感じられるほどに穏やかで静寂そのものであった。記憶にある門や柵は長年の雨に打たれて橙色の黴が斑に付着していたのに、傷んだ箇所は綺麗に修繕されて白ペンキが塗ってある。柵の向うは、木という木はすべて切り倒されて、一面が平坦で空虚な、小綺麗な芝地になり、あるものといえば白いフェンスだけで、まるで墓地のような雰囲気漂う場所になっていた。

玄関の扉や窓までも白く塗ってあった。そして玄関脇に咲いていた八重のバラも切られていた。花を愉しむことさえもしない人が住むようになったのか。ノックに応じてドアを開けたのは若い女で、上から下まで白づくめであった。編物の最中であつたらしく、白い毛糸に白い編棒を片手に持ったまゝである。その声までが汚れのない感じであつた。そして「私」に應對しているあいだじゅう、片手は血の気がなくなるほどにしっかりとドアノブを握りしめており、いくぶん警戒心を解いたところに白いオーバーオールポケットに白い編物を仕舞つたのである。

やっと家に請じ入れられた。かつては茶の匂いや土の匂い、ワインやゼラニウム匂いがたっぷりと染み付いていたのに、今はフランスワニスを塗った家具、羊毛の敷物やオイルクロスの匂いが部屋に充満していた。眞白い壁には黒い額縁に入って聖書の文が飾られてある。さらに、家具店の展示場のように品よく配置されたピアノやサイドボードの上には、結婚プレゼントが綺麗に置かれていた。

ここまでの家の内と外の描写を原文でみると——上の日本文と重複するものもあるが——次のようになる(イタリックは引用者)。

the gate and the fence ... had been neatly repaired and painted *white*, (p. 176, ll. 24-25)

another *white* fence in place of the old wild elderberry hedge (p. 178, ll. 5-6)

... I stood there ...staring at the *white* fences (p. 178, l. 8)

the newly *white*-painted windows (p. 178, ll. 9-10)

It [the front door] was ... painted *white*! (p. 178, ll. 15-16)

She too was dressed in *white*. (p. 179, ll. 3-4)

She seemed ... like a paling out of the *white* fence ... She seemed to me ... straight and *white* which way I looked at her. (p. 179, ll. 3-6)

Her face was *white*, too; ... town *white*. (p. 179, ll. 6-7)

She carried the *white* wool and *white* bone needles ... (p. 179, ll. 7-8)

Her voice was *prim*: a *white blameless-life* kind of voice. (p. 179, ll. 14-

15)

Her *white*-knuckled hand was tight on the door … (p. 179, l. 20)

She put the *white* knitting in the pocket of her *white* overall. (p. 179, l. 28)

the prim, black-framed verses on the *clear* walls (p. 181, ll. 19-20)

これらの結論としては家の中には氷のように冷やかな雰囲気 (something ice-cold, p. 181, l. 23) があり、実質 4 頁の中に「純白」「清潔」を示す語をこれほどまでに繰り返して使われると、我々読者も宗教的な効果を感じないわけにはいかない。(作中でも「私」が感じていた。)そしてサイラスが住んでいた頃とは全く異なる世界になってしまったことを示している。最後の引用文にある verses は一般の詩文ではなくて、聖書のなかの特定の節か或いは詩篇から引かれた特定の短句であって、信者のうちでは周知の数行ではなかろうか。(我が国の仏教あるいは神道を信ずる者の場合と同じに考えると読み間違いになるだろうか。)さらに言えば white, whiteness, blameless, clear などの宗教では特に重要視される (と思われる) 語を多用したのは、Cleanliness is next to godliness. (清潔は敬虔に近し) という諺があることを考えると、単に二つの世界の相違を示す——サイラスの世界も汚れていたわけではなく、彼の世界に関して「汚れて」という表現もない——ためだけではなくて、短篇集 *MY UNCLE SILAS* の序文にある「たしかにサイラスのうちには清教徒的なところはこれぼっちもなかった」Certainly there was no strain of the Puritan in my Uncle Silas … ところを強調することによって、二つの世界の相違を表わしたかったのではなかろうか。とすると、新しい住人は清教徒的なところがたつぷりとある敬虔な信者でなければならぬ。それでこそ二つの世界が生きてくる。

それから「私」は今では遺跡ともいふべき所へ入っていく。すなわち

サイラスが沢山の酒壺を貯えておいた地下室である。此処も「私」とっては馴れ親しんだ場所なので、明りなどなくても「着馴れたチョッキのボタンを脱すように」素早く段階を下りた。これとは対照的に若妻のミセス・ウェイド＝ブラウンはおっかなびっくり下りてきた。彼女にとっては此処は別の世界である。無数にあった酒壺は処分されてしまっ  
てはいたが、中の空気は以前と変わってはいなかった。その片隅の、ほとんど明りが届かない所に壺が6, 7本残っていた。「壺が……」と口走ってしまってから「私」は懸命に無頓着さを装った。胸はときめき、気が動転していたのである。一本の栓を抜いて嗅いでみる。エルダベリ酒である。「私」にとってはまことに貴重なものではあるが、それを悟られてはならない。ヴィネガーと偽って女にも嗅がせた。いかに新婚早々でも家庭の主婦であるからには、ヴィネガーを知らないはずはない。「発酵している」(fermented) と偽って彼女の疑念を晴らした。つぎはカウスリップ酒である。こちらは「馬具油」(harness oil) とごまかして、彼女が嗅ぐ前に栓をしめてしまった。いくら女でもこちらはバレてしま  
う。

どちらも「私」はサイラスの真似をしている。この二種類の壺を遺しておいたことが、彼のユーモアのセンスの現われと読みたい。「サイラス物」ではこのすぐ前の作品に当る‘The Death of Uncle Silas’では真夜中、家政婦が熟睡している間に地下室へ下りて、薬瓶にワインを詰めておくのだと本人が言っている。そして家政婦が薬を無理に飲まそうとすると、一方を「馬具油」他方を「ヴィネガー」を飲むようだと、さも飲み難さを装いながら、その実ほくそ笑んで二種類のワインを飲んで  
いた。そしてサイラスの死の直ぐ後に、ベッド脇のテーブルの薬瓶は二本とも空になっていた。無類の酒好きのサイラスにして悪戯心いたずらがなければ、ユーモアのセンスがなければ、たかだか6, 7本のワインを遺してあの

世へ逝くわけがない。故意に数本を遺しておいて、生きている人間がそれにどのように反応するかを楽しみにしていた、と読みたいが如何であろうか。

Five minutes later we came up the cellar steps again, she carrying the candle, I with the sack of wine on my back.

‘Outside,’ she kept saying. ‘Outside, put them outside.’

I laid the sack tenderly on the earth outside the door.

‘It’s very good of you,’ she said … (p. 185, ll. 4-9)

5分後に私達は再び地下室の階段を上った、彼女はローソクを持ち、私はワインの袋を背にして。

「外へね」と彼女は言っていた。「外へ。なにはともあれそれは外へ置いて下さいな。」

私は玄関の外の土の上にそっと袋を下した。

「本当にご親切様」と彼女は言った。

「私」にとっては喉から手が出るほど欲しい品を、「いつ破裂するかもしれないから処分してあげる」——彼女に対して心理的効果は充分である——と思着せがましく言い、相手には何の疑念も抱かせず、かえって感謝の気持さえ抱かせて頂戴する場面、それに加えて、如何にも危険物を扱うように袋を肩から下す仕草は、喜劇を見ているようでさえある。

つぎに「庭を見たい」と言って庭へ出る。もちろん此処も大きく変化している。馬鈴薯畑は小綺麗な芝地になっており、向日葵もリラの木もなく、赤い百合もすべて抜き取られて赤いゼラニウムの花壇になっていた。この光景は *The place had been ruined.* (そこは荒廃してしまっていた) と *ruin* を用いて表現されている。これは主観の相違によるのだが、「私」にはそう感じられたのである。

しかしこの「荒廃した」場所にもまだ前の世界の物が遺っていた。豚小屋である。ミセス・ウェイド＝ブラウンの言葉では「冬になったら壊して暖炉の薪にする」とのこと。あぶないところで再見できたわけであ

る。中を見ようと入りかけると「入らないで、鉄砲があるから」と言う。もちろんサイラスが愛用した獵銃である。しかも弾が込めてあると言う。ここでも‘The Death of Uncle Silas’のある場面が生きてくる。サイラスが他界する日に「私」が訪れて豆畑を通ったとき、カケスが撃たれてハシバミの棒にぶら下っているのを目撃している。家政婦も銃声を聞いているので、確かに彼は死の直前（あたり）に銃を発射している。それなのに若妻は弾が込められていると言う。サイラス以外にそれをする者はいない。とすると、ここでも我々は彼のユーモアのセンスのお蔭をこうむることになる。すなわち、

‘Have you a licence?’

‘Oh, no.’

‘You know you can get into serious trouble for having a gun without a licence,’ I said.

‘Trouble? No!’

‘Yes,’ I said. ‘And then guns are dangerous. You say it’s loaded?’

‘Yes.’ She was scared, whiter than ever.

‘I’d better have a look at it,’ I said. (p. 186, ll. 11-19)

「ライセンスはお有ちですか」

「もってませんわ」

「ライセンスなしで銃を持てると、とんでもない面倒な事になるんですよ」

「面倒な事ですって？ いやだわ！」

「そうなんですよ」と私。「銃って危ないんです。弾が込めてあるっておっしゃいました？」

「はい」彼女は怯えた様子で、前にもまして顔は蒼ざめていた。

「見てあげましょうね」と私が言った。

サイラスが弾を込めて遺しておいた古い獵銃をめぐって喜劇的一幕が始まる。過剰な脅しの言葉にそれなりの反応を見せる若妻は、自らは意識しないで、すでに喜劇の舞台に立っている。場面は進行する。いつな

んどき暴発するかもしれないから、いま発射してやると言いながら、まるでバナナでも持つように無造作に、危険な銃を携えて小屋を出た。そして長くて丈夫な紐 (Good string. A long piece) を要求した。女はすぐに家へ駆けこんで、

And very soon the woman came running back with the string in her hands. (p. 187, ll. 13-14)

そして直ぐに女は両手で紐を持って駆け戻ってきた。

このとき女の顔は緊張のあまり引き攀っていたにちがいない。そればかりか「両手で紐を持って」いる。いくら長いといってもたかゞ紐のこと、ロウブではないのだから、片手で持てる嵩であるはず。しかしこれは頭上で高く両手で引張って、紐が丈夫であることを示す動作である。色白の、白いオーバーオールを着た嫺やかで楚楚とした人妻が、ついこの時ばかりは大袈裟な動作を見せてしまったと読みたいが、どうであろうか。

さらに事態は進む。銃を豚小屋の囲い柵に固定して、紐を引金に結びつけたとき、女はそれを見て震えていた。なのに、怖くはないかと尋ねると、首を振って否定の意志表示をした。少し離れているように忠告すると、

At first she stood a yard or two away, and then ten yards, and then when she saw me cocking the gun and letting out the string she was thirty yards off, and the last I saw of her was as she stood on the threshold of the house, with her hands over her ears and her face as white as her wool. (p. 187, ll. 25-29)

初め彼女は1、2ヤード離れていた、それから10ヤード離れ、それから私が撃鉄を起こして紐を延しているのを見たときは30ヤード離れており、そして最後に彼女を窺うと家の入口におり、両手で耳を塞ぎ、毛糸と同じくらいに顔は蒼白であった。



もちろん彼女にしても銃の発射は興味のあることで、直ぐ側で見たかったに違いない。しかし怖さがある……上で描写されていることになった。顔面は蒼白になり、腰を屈めて少しずつ後退<sup>あとずさ</sup>りしてゆき、気がついたらいつでも家の中へ逃げこめるように、戸口にいた。この一連の女の姿を想像できるのも、サイラスが故意に弾まで込めて遺しておいた猟銃のお蔭である。

このあとで若妻は「宅はけっしてお酒を頂きませんし、それに鉄砲も撃ちません」‘My husband is a teetotaller, and he doesn’t shoot.’と言っている。「絶対禁酒」と「殺生の禁止」とが直ちに百パーセント清教徒と結びつかないまでも、これらは上の二件を締め括る言葉であると同時に、二つの世界の相違を明白に示している。さて、発砲しおえた猟銃も「私」にとっては貴重なおじの形見である。壘と一緒に何処かに捨ててやるからと偽わり、大いに感謝さえされて——as if I had done her a great service. という表現がある——有難く頂戴した。これも喜劇の一場面である。

そろそろ「私」が辞去しようとする時、彼女は或ることを思い出した。年老いた女が家を見たいと訪ねて来たという。話を聞いてみれば、紛れもなく家政婦その人である。いまの世界の住人には全く理解もできない古い盥が欲しいと言う。これはもちろん毎週金曜日の夕方に、サイラスが嫌がるのを無理に彼女が沐浴させた盥であって、サイラス亡き今となつては、彼を思いだす縁<sup>よすが</sup>となるものはこれを措いて他にない。しかしそれが無いと知ると、庭に立ったまゝ泣いたという。何も知らないミセス・ウェイド＝ブラウンは老婦人が酔っているか、さもなければ頭が狂っているのではないかと思ったという。当然のことである。が、家政婦は酔っていたのでもなければ精神に異状を来していたわけでもない。二つの世界の相違があまりにも大きいだけのことである。

この最後の場面は前の二つと同種の喜劇ではない。家政婦はこれまで「癩癩持ちの」(irascible), 「冷酷な」(flint-hearted), 「手子摺らせる人」(a tartar), 「気むづかしい老いぼれ」(a sour old tyrant), 「老いぼれ雌山羊」(old nanny-goat), 「老いぼれの役立たず」(old straight hook), 「古いダイオウみたいに辛いやつ」(tart as a stick of old rhubarb) 等々, 悪し様に言われ通し——すべてサイラスの口から出た——であった。そして「サイラス物」で彼女が登場する作品では, 優しさは見せても, 涙を見せたことなど一度としてなかった。ところがいま彼女は,

… standing there in the summer garden, all broken up and stupefied, weeping her heart out for … (p. 190; ll. 12-13)

……その夏の庭に立ちつくして, ……を欲しいと言って, 悲しみに打ち拉がれ, 身悶えて哭いていた……

この情景は「私」がミセス・ウェイド＝ブラウンの話聞いて想像したものである。しかしこの通りであったろう。最後の作品の最後の場面で初めて家政婦は慟哭する姿を見せる。ということは, 家政婦はこれまで「私」にも我々読者にも, その一面だけしか見せてくれなかった。いま他の一面を見せてくれて, 彼女の全体像が把握できた。「私」は「帰還」して全てのものを手に入れた。我々読者もここまで「私」に付き合ってきて全てのものを手に入れたと言えるのではないだろうか。

(おわり)